随筆■死と愛と■川田俊子

随筆

死と愛と

川田俊子

読売新聞社

著者紹介　かわだ　としこ
歌人の故川田順氏夫人。1909年京都生まれ、日本歌人クラブ、女人短歌会会員。著書に歌集『蟲』、随想集『女のこころ』その他がある。
（筆名　鈴鹿俊子）
現住所＝藤沢市辻堂 6361

死と愛と

昭和45年12月25日　1刷発行　¥ 630

著者　川田俊子
発行者　二宮信親
印刷所　細川活版所
製本　協和製本

発行所　東京都中央区銀座3の2の1　〒104
大阪市北区野崎町77　〒530　読売新聞社
北九州市小倉区明和町1の11　〒802

© TOSHIKO KAWADA 1970

目

次

死と愛と(1)……5
伎芸天　参殿　月光　北九州へ
わが師
死のあとさき……47
中国の土偶　東大病院にて　高野ゆき
木蓮　東慶寺
愛と死と(2)……95
国府津　辻堂で
折りおりの記……165
尾崎一雄さん夫妻　お金のこと　即興歌
実家のこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きのうきょう……203
蘇峰先生　良寛　京都のことを
尾山篤二郎さんのこと　空虚　テレビ
放送　老境　赤富士　東大界隈
後記……289

表紙絵・中村直人

死と愛と（1）

伎芸天

川田の亡きのち、いろいろなものを整理していると、「秋篠歌碑関係一切」と書いた紙の袋が出てきた。昭和三十二年五月三日と日付もあって、建碑式のおりのものである。

中を見ると、種々の写真、新聞の切り抜き、その時の各氏からの手紙等であった。私はあれこれと手にしながら、伎芸天の二枚の写真をとり出した。どちらも専門家の撮影したもので、右斜めから写してある。一枚は背景が真っ黒な中に、光に照らし出されたみすがたで、スマートな美しさだ。

光が強くあたっているのは、高く結いあげた髪の前方から額のあたり少しと、左肩の先、下がった左腕の上部から親指と人差しゆび半分である。はだけた胸、着ているころもの前部分の襞等もそれにつづいてくきやかであるが、それも像全体からみると小部分で、あとは光はあたっていない。けれどもバックの黒からはよく浮き出ている。形のよい口もとは少し微笑のさまと思われる。首もとのひだが三重になってあらわれ、それがネックレースのような美しさをみせている。

胸や口の上、腕などの剝落もよく出ているが、これがなかったら古い仏像としての美は半減すると思う。

川田はこの写真がよほど気に入ったとみえて、

諸々のみ仏の中の伎芸天何のえにしぞわれを見たまふ　　順

と墨で裏に碑の歌を書いている。

もう一枚の写真は、絵はがき型のもので、バックに本堂の白い壁と黒い柱がみえ、ありのままのようだが、カメラの位置がちがうのか、前者より首をよけいにかしげている。瞼は閉じられているものとばかり思っていたが、これでは薄目をあけている感じだ。胸のふくらみも光が強すぎるためかわからず、首の襞も出ていない。両肩に光があたっているために、後者の方が肉づきがよいように見える。指の表情の美しさなども絶対前者だ。私はみくらべながら、写真の伎芸天にしばらく見惚れたのであった。

それから幾枚かあるスナップ写真の一枚の面白い情景に心引かれた。それは木立ちの繁みに立っている碑の上に、白い布がかぶせてあるもので、前に紅白らしい幕が下がっていて、除幕式の直前のものだ。私はだんだんに式の日のことが思い出されてきた。

あの日は前日の雨模様もからりと晴れ、木々の緑がひときわ冴えて蒼い空の下、躑躅や山吹の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花が美しかった。前川佐美雄氏の司会で会は進行し、吉井勇、山口誓子、富田砕花、上野精一ら先生方の他にも、田中豊、水谷川忠麿、長沢美津、橋本多佳子、池森亀鶴、片桐頭智諸氏の他二百余人もの方が来て下さった。祝詞をいただいた方々はこうして朧げながらお名前が浮かぶけれども、その夜の奈良ホテルの祝賀会と共に、あまりにも多くの方々に会って記憶も茫然となっている。その中で妙に今も思い出されるのは、伎芸天の立たす本堂前での吉井勇先生のお話の中のお言葉であった。「川田君は文学ひとすじに来られるべきではなかっただろうか……」と。吉井先生には、忙しい中をわざわざおいで下さって、好意あるお話をしていただいたのだから本当に感謝している。それでいてそのお言葉にさからうのではないけれども、「川田の一生はあれでよかったのだ」と、私は思う。

紙袋の中から出てきた写真や、新聞の切り抜きを見ながら、あの時私には誰にも言えないひとりの気持ちがあったのを思い出した。それは新聞社の方などがカメラを向けられた時は、身をよけてなるべく写らないように意識したことだった。華やかなよろこびの記事と共に、二人の写真が新聞に出た場合、同じ関西に住むかつての身近な人たちの眼に、どんなにうつるであろうか、そのことを想像すると、私にはそんなあつかましいことは出来なかった。五種類の新聞の切り抜きをみると、私のすがたはどこにもない。川田はどう感じたであろうか、いまは少しさびしい気

もするけれども。

秋篠寺は東の通用門より入ると、先ず国宝の金堂（本堂）が、周囲の木立ちの中に、落ちつきをみせて眼に入る。四角いお堂の屋根の反りもやわらかく、本堂は丹塗りで天平の昔を思わせるが、その中に、本尊の薬師如来、帝釈天等と共に伎芸天は左方端に立っておられるのだ。

これだけでもこの金堂の存在の価値は高いけれども、もう一体、秘仏の大元帥明王がおられるという。私は絵はがきによって、その牙をむいて虚空を睨んだ恐ろしいお顔を眺める。説明によれば七尺二寸余もある半裸像で、全身に蛇を巻き髪は焔となって逆立っているとかいてある。その威徳広大なるによって、わが国の密教で大変重んぜられたとのことだ。私は思う。この丹塗りのお堂の奥深く、怪異ともいえる大元帥明王のおられることによって、みえないながら何となしの重厚さを、そして伎芸天の一入の美しさを。

私は、昨年（四十四年）十二月初め大阪へ行った時、奈良の前川佐美雄さん夫妻を訪ね、そのあとひとり秋篠寺を訪ねた。十二年ぶりである。建碑の時ご厄介になった堀内瑞善師はすでになく、祥永氏がご住職である。氏と共にまず碑の前へ行った。まわりの木々はのび、以前より一層落ちつきを見せ、しっとりと立っていた。あとで紅白の萩が植えられたということだが、いまは

花はない。碑のうしろに回ってみた。そして三十二年酉年ということが刻ってあるのを、初めて知った。

境内は掃除がゆきとどき、茶の花、山茶花のはながこぼれている。色づいた木々の中にもみじの紅葉がひときわ眼に沁む。私らの他に誰もいない。あきしのが舞踊劇の舞台になった時、川田が松竹の高橋歳雄氏その他の方々とここに来て植えたという木蓮の木も大きくなり、毎年花をつけるということだが、それも今は花はない。路地を歩いて行き、祥永さんに金堂の鍵をあけていただいて中に入る。小暗い堂に光が射し、立ち並ぶ仏像たちは以前と同じに立っておられる。十二年という時の流れは一瞬に消えさったかと思われた。伎芸天に近づきしばらく黙禱する。それからあとずさりしてまた仰ぐ。祥永さんは前面の戸のあちこちを少しずつ開けたりして、光を入れられるごとに、伎芸天の真っ黒なお体が変わって見える。

山口誓子氏は、ミロのビーナスが来た年京都で見られたらしく、

万緑にこは大理石の伎芸天

という句をつくられた。

お寺を辞そうとして送られて境内を歩いて入り口の方へくると、南の方へも道がつづいている。

「あちらにも門があるのですよ」と祥永さんは言い、樹木の繁った草深い間の道を途中まで案内された。

川田は大正十年に出した歌集『山海経』の中に

あきしのの南大門の樹の下は蛇も棲むがに草しげりたり

と歌っているが、そのあたりは当時と少しも変わっていない感じであった。

除幕式当日よりもその前日のことは、割合鮮明な記憶として残っている。その五月二日川田は山口誓子さんと共に前川佐美雄さんを訪問することにしていた。私も一緒に大阪の宿を出たのは正午過ぎであった。

大阪市中の盛り場を車で通ると、メーデーのあとの白い紙が路上一杯にちらばり、労働者たちがスクラムを組んで騒いださまが、眼にみえるようであった。そんな中を私たちは南へ南へと走りつづけた。そしてようやく生駒、金剛、葛城の山なみが右前方に見え出し、くるまが走りゆくにつれて、それらが近づいて来た。「あれが二上山(にじょうさん)ですね」と誓子先生が声をかけられた。私はその二つに分かれた山の頂を見ながら、ふと国府津で朝夕眺めた箱根の二子嶺を思い出した。関東の山々の荒々しさに比べ、いま見ている山並みのなんと軟かい美しさだろうと思った。

いつしかくるまは八尾に来ていた。その街はずれに来た時川田は、指を耳のそばで天の方へ向けて「聴いてごらん」という。空の高所で雲雀がしきりに啼いているのだ。くるまは大和川と石川との合流点の橋を渡ろうとしていた。

「ちょっと休もうではありませんか」川田はそう言ってくるまを降り、川の堤へ上がって行った。私も同じようにゆき堤の上から向こう岸を見ると、叢の傾斜地に何か白い長いものが並んでいる。運転手さんは双眼鏡を貸してくれた。それで見ると、河内木綿を晒しているのだ。人の動きなどもありありと見える。土手に立っているうちに、雨まじりの風がはげしくなってきた。

私たちを乗せたくるまはまた走り出した。すると眼の前も、向こうの山の傾斜も葡萄の棚が見えて来た。葡萄はのびたばかりの葉を風に靡びかせている。

「この辺はカタシモと言ってね、以前私はここの葡萄畑をわざわざ見に来たことがありましたよ」と誓子さんは言われる。

ポツリポツリと落ちて来ていた雨が、急にはげしくなって来た。くるまの窓ガラスに雫がたれるのを見ている時、そこへ中学生の一団が列をなしてやって来た。各自ビニールを頭に被ったのみで、雨に濡れてくるのだが、どの顔を見ても屈託のなさそうな明るい表情だ。なおも走ると、えぐれて赤土の肌をあらわに出した山に真っ正面に対うところであった。

「亀ヶ瀬の国ざかいでしたね」と言いながらお二人は、亀ヶ瀬というのはあの山の形からとった名であること等話していられる。近づく大和川の流れを前にして、人夫たちは山の土をせっせと掘っていた。そこは道路と同じレベルに土地が広がりつつあった。

小さな橋を私たちのくるまが渡ろうとした瞬間、「龍田川だよ」と川田が言ったので、運転手さんは速度をゆるめてくれたが、両岸の楓の若葉が、川面に被いかぶさっていて美しい。私は川上を見たり、川下を見たりしている間に、あっけなくそこを過ぎた。間もなくバスが列をなし止まっている法隆寺の前を過ぎると、単調な道がつづく。サイクリングの青年の一隊を、私たちのくるまは追い越して走った。

いよいよ奈良に近づいたようだ。畑の中の小さな川を渡った時、「佐保川だよ」と川田はささやいた。あす行く秋篠寺はその左、岡の木立ちの中にあるのだ。歌碑もすっかり出来上がっていることだろう。桜の並み木街道を奈良市中に向かった。興福寺の塔や大仏殿の屋根が見えて来た。そして坊屋敷の小路のべんがら格子の家の前でくるまは止まった。その佐美雄先生の家の低い格子戸をくぐった。お二階へといわれるので箱梯子に足をかけながら誓子さんは冗談のように、「きょうはえらいきれいになっていますね、この前来た時より」と言われたので皆笑った。二階の部屋には塑像のミロのビーナスが置いてあったり、壺が飾ってあったりする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com